
戦場のヴァルキュリア ～未来へのキズナ～

名無しの7

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場のヴァルキュリア ～未来へのキズナ～

【Nコード】

N3292Z

【作者名】

名無しの7

【あらすじ】

旋律が降り注ぐ空。見上げればモノクロの空。その空へとまた、大事なものが消えていく。何度きれいな夢を見ても、目が覚め空を見れば、映るのはすべてが消えていくモノクロの空。彷徨い続けた結果、人は何を思い、何を見つける？

プロローグ（前書き）

こんにちは、名無しの7です。初心者なので
完結までどうか、あたたかい目で見守って
いただけると幸いです。

とまあ前置きはこのぐらいで。

戦場のヴァルキュリア〜未来へのキズナ〜

始まりです！！

ブローグ

左右が切り立った崖に挟まれた山道で、金属音が響いていた。飾りがなく片手で振れる両刃の剣と、濃い青色で刀身が螺旋状になっている槍が交差するたびに、周囲に金属音が鳴り響く。

剣を振っているのは二十代前半と思える黒色の髪と瞳の男性だ。

男の左わき腹と右足の太もからは血が流れている。

槍を振っているのは二十代前半と思える長い銀髪と赤い瞳の女性だ。おそらくこの女性が男にけがを負わせたのだろう。

「ハアッ!」

何回か打ち合った後に男性がよろめく。女性は男がよろめいた瞬間、右足の踏み込みと同時に槍を突き出す。

「ガハッ!」

突き立てられた槍を受け切れず、男は胸の中央から血を流しながら地面を転がっていき、数回転がってから停止する。

「く………そ………」

男は自分の意識が薄れていくのを感じた。薄れていく意識の中で男は、

女性が近寄って来るのを、気配と足音で察する。

「ここまでだな」

女性の声が耳に届くと同時に、男は光に包まれる感覚に落ちた。そして

男はなくなりかけていた意識を完全に閉じた。

第一話 出会い（前書き）

投稿ですが一週間に一話のペースで、
なるべく書いていきたいと思っています。

それでは・・・

第一話、出会い

始まります！

第一話 出会い

地球によく似た世界ミッドチルダ。魔法が文化として発達していること以外は、地球とあまり変わらない。

「このあたりかな？」

その世界の空を飛びながら私、高町なのはは呟いた。いま私は次元震が起きた場所へと向かっている。

《マスター、生命反応を確認しました》

「わかった。ありがとう、レイジングハート」

レイジングハートが生命反応を確認したみたい。次元漂流者の可能性が出てきた。次元漂流者とは、世界をまたいだ迷子だと思えば簡単だと思う。

《いそいでください。反応が徐々に弱まっています！》

「え！？だったら急がないと！」

反応が弱まっている。それはつまり、次元漂流者の人は死にかけているということだ。

私がその人を見つけたのは、その会話から数分後だった。
生命反応が確認された場所は、木が生い茂っていたので、レイジ
ングハートに言われなければ気づけなかった。

次元漂流者の人は仰向けになって倒れていた。服装は青を基調とし
た軍服と思え服。その服も胸の真ん中や、右足の太ももの辺りが赤
く染まっていた。顔は黒髪の前髪で隠れている。

（なんて酷い怪我・・・）

私はそばまで近づき、両膝を地面につけてから、右手で前髪を払っ
た。私よりも年上だと思える男性で、その表情はすごい穏やかで・
・まるで死を望んでいるかのような表情だった。

（死にたがっているのかな？・・・ううん。例え・・・そうだった
としても、死にかけている人を助けられないなんてことは・・・私には
できない！）

「お願い、レイジングハート！！」

《yes、my・master》

私はレイジングハートをその人の上に置いた。すると、桃色の光が、
男性を包み込み始めた。

（応急手当みたいな魔法だけど・・・無いよりは！！）

けど、傷が治るところか予想外のことが起きた。

「ブッ、ゴフッ、ガハッ、ゴホッ」

「ええ!？」

突然男性が苦しみ出したと思ったら、血を吐き出した。
あわてて魔法を解く。解くと先ほどの表情に戻った。

(どうして・・・とにかく迎えを呼ばないと)

その後、その男性はへりへと収容され病院へと運ばれました。運送の途中に何度か魔法で治療しようとしたので、吐血すると説明して止めました。

第一話 出会い（後書き）

あゝっという忘れた。

たまにですが、二話連続だったりします。

こちらの気分、もしくは進みがよかったら
二話連続でいきます。

次回予告

自己紹介とちょっとしたハプニング

とまあこんなふう次回予告もやれ
たらやっていくと思います。

第二話 自己紹介とちょっとしたハプニング（前書き）

うーん。どーしたものかなって。

投稿がかなり遅くなる可能性がある。

まあ・・・そのときになったらお知らせするとして。

第二話 自己紹介とちょっとしたハプニング

始まります！！

第二話 自己紹介とちょっとしたハプニング

第二話 自己紹介とちょっとしたハプニング

なのはview

男性を保護した日から三日後に、私は男性を収容した病院に訪れていた。

「あの人・・・大丈夫かな」

《マスター・・・まだ悔やんでいられるんですか？》

三日たつてからきた理由は、あの事を悔やんでいるからだ。あの事とは、魔法で治療しようとして、吐血したことだ。何も知らないとはいえ、彼に酷いことをしてしまった。

《ですがマスター。あの行動は間違っていますから・・・》

（レイジングハートが何を言いたいのかは分かる。でも・・・）

気分が沈んでいたせいか、下を向いて歩いていた。下を向いて歩くとどうなるか？そう・・・何かにぶつかる。

「キャッ!？」

「え？」

何かにぶつかった私は、しりもちをついてしまふ。いたたとお尻をさすっていると、聞きなれない声が降ってきた。

「ああすまない。大丈夫か？」

「あっはい。だいじょ・・・」

上を見た私は硬直してしまった。その場に立っていたのは、あの時保護した男性だった。患者さんが着る真っ白い服を着ている。

「あ・・・」

突然のことで思考が停止してしまう。男性は訝しげにこちらを見ている。

《マスター・・・いつまで尻もちをついているのですか?》

「え?・・・ふにゃああ!？」

レイジングハートに言われてあわてて立ちあがる。あわてて立つと大抵何かにぶつかる。

「あがつ!？」

「きゃうつ!？」

あわてて立ち上がったからか、男性の腹部に頭突きをしてしまった。私は頭に、男性は腹部に手を当てしばらくその場にうずくまっていた。

立ち直るのに五分くらいかけてから私は男性と共に彼の病室へと向かった。

「あの・・・ごめんなさい」

病室についてから、私は男性に謝罪する。

「いや・・・かまわないよ。反応できなかったこちらが悪かった」

私はきよんとしていまう。てつきり怒られると思っていたから。

「それよりも教えてほしいことがある。君の名前とこの世界についてだ」

え?つとまた思考が停止してしまう。

「あの・・・どうして?」

「どうしてって・・・君は俺を保護したんだろう?保護してくれた人の名前を知らないのもなんか変だしな。世界に関しては君の名前聞いた後にも説明してもらったらどうだ?つと医師に言われた」

そういった理由ならいつか。と思った私は、一度こほんつと咳払いしてから右手を差し出して、

「私は高町なのはです」

「マサトシ・アーヴィングだ。よろしく」

互いに握手をかわす。

なのはview end

第二話 自己紹介とちょっとしたハプニング（後書き）

次回予告

第三話 形見

さーてさてどうなることやら・・・
あーっとそうだった。一時期投稿
速度が上がります。理由はあとで。

ではまた、次回をお楽しみに！！

第三話 形見（前書き）

投稿が速くなるとか遅くなるとか言うて
すみません。

後書きで詳しく説明します。

それでは・・・

第三話 形見

始まります!!

第三話 形見

なのはview

この世界のことを説明する前にひとつだけ質問してみた。

「アーヴィングさんは・・・魔法って信じますか？」

私の質問にアーヴィングさんは目を細めた。なんとなく予想していたので、あまり頓着せずに話を始める。

「いま、アーヴィングさんがいる世界は、ミットチルダとゆう世界です」

「ミット・・・チルダ？」

「はい。この世界は魔法が文化として発達しています。そして、首都クラガンには時空管理局とゆう組織があります」

「時空管理局？」

「はい。簡単に言いますと、警察署と裁判所を一つにした組織です。私はその組織で教官をしています」

「・・・・・・・・」

とりあえずあらかたの説明はした。私の説明を聞いたアーヴィングさんは、顎に右手の人指し指をあて、黙ってしまった。整理しているのかな？と思っっていると不意に、

「すまないが・・・ナイフを知らないか？」

「え？ナイフ・・・ですか？」

私の質問にアーヴィングさんはうなずいた。

「え・・・つとごめんなさい。たぶんですけど、管理局の方で処分したかもしれません」

私が答えると、アーヴィングさんは目を大きく見開き、その後「そう、か」と呟いてからうつむいてしまった。怪訝に思った私は思い切って聞いてみることにした。

「あの・・・ナイフがどうかしたんですか？」

「母の形見だ」

「かた・・・み？」

声がかすれてしまった。形見が意味するのはただ一つ。私は何も言えなくなってしまう、うつむくことしかできなかった。

『なーのは!』

「ふにゃああ!？」

突然半透明のモニターが出現し、そこから場違いの陽気な声が聞こえてくる。

「はっはやてちゃん!!」

『な〜んかタイミング悪かったみたいやな。
なんやその空気?』

モニターに映っていたのは、私の親友であり、いま配属している部隊の隊長を務めている女性です。

『ん? もしやその人か? なのはが保護した人は』

はやてちゃんがモニターからアーヴィングさんを確認する。ちなみに、アーヴィングさんは目を大きく見開いて、突然の事に驚いている。

「え〜っとそうだけど・・・どうかしたの？」

『ん〜なんかな。その人が持っていたものがウチ届いているんよ』

「・・・その中にナイフってある?」

『ナイフ? それらしいのはあるけど、どうかしっ』

「それ持ってきて早く!!」

私が声を張り上げたことに、はやてちゃんは驚いてはいたが、持ってきてくれるらしい。

その通信から数十分後に一人の女性が病室を訪れた。

「あつフェイトちゃん!!」

「やつほゝなのは。驚いたよ。なのはがいきなり声を張り上げるから」

「にやはは、ゴメン」

訪れたのは金髪をツインテールにしたフェイト・テストア・ハラウオンちゃん。私の親友です。

「はいこれ。頼まれたナイフだよ。たぶんこれだと思っけど」

フェイトちゃんが差し出してきたのは一本のナイフ。長さは握りこぶし二つ分くらいで、直刃で飾りが無かった。

「これで合っていますか？」

私は受け取らずにアーヴィングさんに確認した。彼はうなずいて肯定を示した。私はフェイトちゃんへと視線を移してうなずく。それだけでわかってくれた

らしく、フェイトちゃんはアーヴィングさんへと近づきナイフを手渡した。

「・・・・・・・・」

（なのは。あのナイフは何だったの？）

アーヴィングさんは受け取ったナイフを見つめている。それを見たフェイトちゃんは不思議に思ったのか小声で私に聞いてきた。

（うん。お母さんの形見なんだって）

（かた・・・み？）

フェイトちゃんも私と同じ反応をしている。無理も無いと思う。すると、アーヴィングさんがこちらを向き質問してきた。

「すまないが・・・君の名前は？」

私とフェイトちゃんはポカーンとしてしまう。あれ？と考え直してみると、フェイトちゃんが自己紹介してないことに気付いた。

「フェイトちゃん・・・自己紹介した？」

「して・・・ない」

その後、なぜだかしらないけど、ごめんなさいを連呼

し始めた。当然、アーヴィングさんは戸惑う。それを見た私は苦笑いをしていた。

そこから自己紹介するまで数分かったのは余談である。

なのはview end

第三話 形見（後書き）

投稿速度についてですが、

いま自分は学生で冬休みに入っています。

なので、冬休みの間は速くなるということです。

遅くなるのは・・・

来年からです。まだ先です。時がきたらお伝えします。

それでは・・・

次回予告

第四話 機動六課

お楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3292z/>

戦場のヴァルキュリア ～未来へのキズナ～

2011年12月25日12時46分発行